

F 6 はハング状の滝のため右岸を捲く。倒木が多くなる。小さなゴルジュを越え小滝を越えると、右岸から小沢が合流し、一五<sup>分</sup>程の美しい滝をかけている。F 9 で左岸を捲くと、沢にはコケが多くなりヤブがかぶさるようになる。もう源流部だ。ミズバシヨウの群落がいくつかわらわれたあたりで右にヤブをこぐと堀田林道に飛び出した。

(記・△)

(タイム)

出合一三・三〇―二俣一四・〇〇―沢終了一五・五〇  
堀田林道一六・〇五

## 赤滝沢左俣

一九七八年七月二十八日  
初

◆天気(晴)

赤滝沢左俣は流量も少なく距離も短いので、たいした滝もあるまいとたかをくくって入谷したところ、思いがけず三〇<sup>分</sup>程の大滝に出くわし、小さな沢の割には意外なよさを発見した。

九時二俣を出発。赤滝沢左俣も流れ込む枝沢も水は酸



赤滝沢右俣の廻行

性が強くて飲用にならない。沢床には鉄分の多い赤い岩がゴロゴロしている。五<sup>分</sup>程のナメ滝を越えてしばらくゆくと三つの連続する滝にぶつかった。下の二つは小さく簡単に越せるが、一番上のはたつぷり三〇<sup>分</sup>程の落差のある二段の滝だ。左岸ブッシュの中を高捲きすることになった。この上流にはもう大きな滝はないが、小さなナメと小滝が続いて、小さな沢の割には結構楽しい。やがて左に涸れ沢を分ける。もう水流も極めてとぼしくなる。簡単な昼食の後、カモシカの足跡のいつばいついたガレ場を登りきると高倉新道に飛び出した。

(記・)

二・三五

〔タイム〕

二俣九〇〇―大滝九・三五―沢終了一〇〇・二五〇―  
〇・三〇―登山道一〇・四〇―霧の平一〇・〇五

### ギンゴ沢 (下降)

一九七八年七月十二日  
口・家 眞手・七

### 平小屋沢

一九七八年七月二十二日

務

◆天気(晴)

高倉山につき上げる三本の沢の中で一番下流の平小屋沢に入る。出合は樹林帯の中で暗いが平凡である。イワナやサンショウウオの姿をみながら進む。橋まではまったく平凡。橋を越えた先で三〇位の滝に出会った。シャワーで登破しようとしたが水があまりにも冷たすぎ、右岸最後の五位の所でブッシュに逃げこんだ。この先また、まったく平凡。滝一個もなく尾根一本へだてただけのギンゴ沢とは対称的だ。二俣から右に入り尾根上に出踏跡をたどって帰る。

(記・)

〔タイム〕

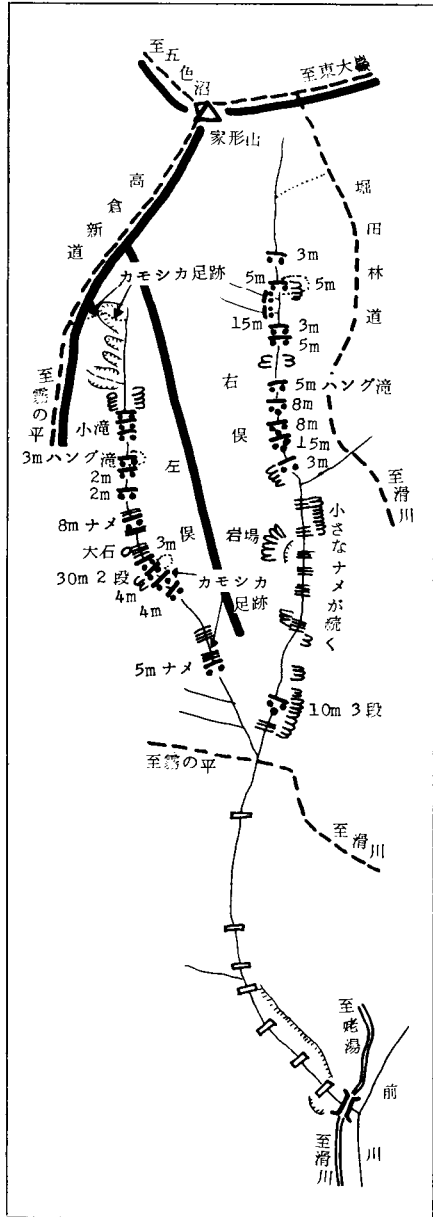
出合一〇・四〇―林道一一・二五―終了(尾根)一

下降開始一〇・四〇―下降終了一二・三〇

◆天気(晴)

一〇時四〇分下降を開始する。尾根のすぐ下から細い水流がありナメがはじまる。最初の一五位の滝は慎重にクライミングダウン。その先も思い出したように小滝をまじえてナメが続く。やがて目の前が切れ落ちて三〇位の二段の滝が現われる。左岸の樹林帯の中をまいて下る。見上げると下段の一〇位は簡単に直登できるし、上段の二〇位も何とか登れるかもしれない。この先次々と滝がかかる。下降は意外にむずかしいもので慎重に行動するが、三つは高捲きし、最後の二つはザイルを出して懸垂下降する。すぐ林道がみえてきてギンゴ沢下降終了。

(記・)



赤滝沢 (作図: 〇)

## 赤滝沢右俣

一九七六年七月三十一日

### ◆天気(晴)

仕事を年前中に終え車で赤滝沢出合まで入る。赤滝沢の水は少々酸味はあるが飲めないことはない。すぐに砂防ダム。人工の建造物が七個次々にあらわれる。右岸に、左岸にと若干のヤブをこいで次々に越えていく。最後の

砂防ダムを越えるとすぐ二俣。登山道が横切っている。右俣の方が本流らしいのでそれに入る。

小さなナメを越えると、F1—10の三段の滝である。やつと沢を登っているという感じになる。左岸を直登して越えると小さなナメがいくつも出てくる。右岸上方には大きな岩場。やがて二俣となり左へ入る。すぐ滝だ。F3、F4と連続してかかっている。左岸を直登してゆが、ホールドは豊富なもののポロポロの岩場だ。F4は左岸のブッシュ帯ぎりぎりを直登。続くF5も直登し